

郷土史料写真社 永江維章について

渡 邊 華*

目 次

はじめに

- 1 先行研究と永江維章の旧名について
- 2 永江博の経歴に関する補足
- 3 永江博から永江維章へ
- 4 文化財写真撮影と郷土史料写真社の開業
- 5 戦前の永江維章・郷土史料写真社の活動
- 6 戦後の文化財写真撮影と日本民土俗研究会

おわりに

キーワード 永江維章 永江博 郷土史料写真社 日本民土俗研究会 文化財写真
史蹟名勝天然記念物保存協会 田遊び

はじめに

東京都江戸東京博物館所蔵「永江維章関係資料」（以下、永江資料）は、永江維章氏（1886～1963、以下敬称略）が撮影・収集した有形文化財、民俗文化財、記念物等文化財¹⁾の写真を中心とする約11,000点の資料群である。永江維章については、文部省の委嘱で各地の文化財の撮影を行った、日本民土俗研究会等を主宰した、戦後に板橋区の田遊びの復興に尽力したといったことが永江資料に付随して伝えられている。永江資料は、資料点数の膨大さと永江本人の情報が限られていることが相俟って不明な点を多く抱えた状態にある。この度、江戸東京博物館所蔵資料のデジタルアーカイブス事業の一環として永江資料のデータ整理を行った（令和4年度は9,038点、整理者は岡本伽椰、宮本花恵、渡邊華）。その際、報告者が文献等から永江に関する情報を収集したことから、本稿ではその成果として永江の経歴の整理を試みる²⁾。

1 先行研究と永江維章の旧名について

近年永江維章について言及したものに、板橋区立郷土資料館『田遊び—農耕文化と芸能の世界—』図

*元東京都江戸東京博物館学芸員

録(1997年、吉田政博氏執筆)がある。「日本民土俗研究会の永江氏は「早くから田遊びを支持してこられた」(本田安次氏『東京都民俗芸能誌』上)人物であり、また「祭復活の世話を買って出た写真家」(伊藤専成氏『板橋区立郷土資料館紀要』)であった(参考文献箇所含め原文ママ³⁾)と田遊びに係る永江像が記されている。また、「郷土史料写真社」は永江氏の関係する写真社であったのであろう」とも推測されている。

永江生前の複数の出版物によると、永江維章は過去に「永江博」と称していた⁴⁾。永江博は写真史上知られている人物で、金子隆一氏、藤村里美氏による作家解説によると、小学生の時から写真に興味を持ち、司法省での勤務を経て大正4年(1915)に小西六本店工場研究部に入社、後に東洋乾板、オリエンタル写真工業、日本写真工業に勤務する一方、作家活動も盛んに行い東京写真研究会の幹事や審査員等を歴任、大正6年(1917)には文部省の委嘱により法隆寺の壁画撮影を行い、昭和8年(1933)頃に美術品や郷土資料を学術的に撮影し写真集成として出版する郷土史料写真社を設立したとされる⁵⁾。また、ステレオ写真の制作も行ってたという⁶⁾。

このように、永江博の作家解説には文化財写真に関する事項が含まれているが、後に維章を名乗ったことについては触れられていない。時間の経過の中で、博と維章を結び付けて語られることが少なくなり、維章の名と永江の文化財写真に関する活動の詳細は振り返られることなく現在に至ったと見られる。以下、永江博期・永江維章期を一貫して文化財写真に関係する足跡を明らかにし、永江資料の保存・活用のための基礎情報としたい。なお特筆すべき資料として、写真誌の永江博特集記事⁷⁾(1929年。以下「写壇フース・フー」、永江維章晩年(1960年)のインタビュー記事⁸⁾(以下「インタビュー」)がある。

2 永江博の経歴に関する補足

永江は東京市牛込の生まれで、インタビューによると江戸時代において永江家は旗本であった。写壇フース・フーには「日露戦役の直後、旅順の法院に在勤中から芽生えた氏の写真熱は其後漸次発展して遂に官吏生活の放棄」とある。小西六入社以前は明治39年(1906)に旅順に設置された関東都督府高等法院または地方法院⁹⁾で勤務したと思われる。小西六以降の企業在籍年次を追うと、東洋乾板(大正8年(1919)2月創立)には、発足間もない頃に従業員として在籍した¹⁰⁾。一方で大正8年6月頃に六桜社(小西六)を退社し深川区佐賀町峰岸商店(肥料米雑穀売買業¹¹⁾)横浜支店詰となったとの雑誌記事もあり¹²⁾、各社の変遷や在籍期間等の詳細は不明である。その後大正13年(1924)7月¹³⁾から昭和4年(1929)7月までオリエンタル写真工業に在籍¹⁴⁾、同年のうちに日本写真工業に入社¹⁵⁾した。退職時期は不明である。

また、牛込区東椋町に写真材料店「彰明堂」を営んでいた記事が大正15年(1926)から昭和9年(1934)の間に見られる¹⁶⁾。この頃、写真団体「光友会」責任者¹⁷⁾、「実体写真研究所」主幹¹⁸⁾を務め、いずれも彰明堂と同住所を拠点としていた。

3 永江博から永江維章へ

管見の限り、維章を名乗り始めるのは昭和6年(1931)末頃¹⁹⁾で、昭和8年(1933)頃まで博・維章が混在する²⁰⁾が、それ以降は維章が定着する。永江の昭和12年(1937)の写真集の発行所は、奥付は博²¹⁾、広告上は維章²²⁾となっており、維章は号として用いたものと推測される。維章を名乗る経緯は不明であるが、このころは写真関連企業での動向が絶え、後述の文化財写真に関連する動きが加速する時期と重なり、永江の転機であったと考えられる。



写真1 永江維章(博)
(写真中央、90009050)

4 文化財写真撮影と郷土史料写真社の開業

文化財の写真撮影については、インタビューによると25才の時(明治43年(1910)頃)に写真家として文化財を撮影し歩いたのが始まりで、最初の大仕事は「法隆寺の金堂の写真の模写」(原文ママ)であったという。写壇フース・フー(1929)には「文部省の依頼を受けて田中松太郎氏と共に法隆寺の壁画を撮影に出向かれ、あの難物を完全に写し取られて称賛を博した」とある。田中は大正5年(1916)に文部省の法隆寺壁画保存方法調査委員会よる委嘱を受けて壁画を撮影した²³⁾。同会の報告書には田中以外の撮影者の名前はないが、参加者の一人であったと思われる²⁴⁾。

昭和に入ると文化財関連の団体等に永江が現れるようになる。まず、史蹟名勝天然記念物保存協会(以下、協会)の機関誌『史蹟名勝天然記念物』(以下、『史蹟一』)で動向を見ていきたい。同協会は明治44年(1911)に徳川頼倫を会長として民間で組織され、大正14年(1925)に協会事務所が内務省大臣官房地理課へ置かれて以降(1928年に文部省宗教局保存課へ移管)²⁵⁾、協会の活動は政府事業とほとんど一体化したとされる²⁶⁾。協会の目的は「史蹟名勝天然記念物ヲ研究シ其ノ保存方法ヲ講シ且之ニ関スル思想ノ普及ヲ図リ国体ノ精華ヲ発揚スル」ことを掲げていた²⁷⁾。永江博は協会東京支部の紹介で昭和3年(1928)に通常会員ではなく維持会員として入会し²⁸⁾、その後同誌に永江の写真業に係る記事・広告が掲載された。

(1) 昭和5年(1930)7月(『史蹟一』5-7 雑報「実体写真と史蹟名勝天然記念物の撮影」)

- ①同誌からの紹介— 協会会員の永江は教材用として史蹟名勝天然記念物、建造物美術工芸品の実体写真を製作・頒布しており、文部省が購入した。
- ②永江実体写真研究所(牛込区東椀町)の広告文章— 名勝・史蹟考古・動植物・人物の実体写真の説明、実体写真・普通一般写真の出張撮影について。

(2) 同年9月(『史蹟一』5-9)

- 同研究所(「史蹟と名勝社」²⁹⁾併記)による「実体写真(史蹟名勝天然記念物其他)」の一面広告(1. 国宝及び史蹟名勝天然記念物の実体写真の提供 2. 全国各地の史蹟名勝天然記念物の葉書、プロマ

イド写真 3. 絵葉書・写真帖の作製・出張撮影等の写真万般の業務)

(3) 昭和6年(1931)1月(『史蹟一』6-1)

永江写真研究所(牛込区東横町)による「考古写真頒布」の一面広告(「当該官庁の依頼に依り撮影せる国宝史蹟名勝天然記念物其の他」「文部省保存会及び埼玉郷土会見学旅行各地社寺宝物参考資料」「大和法隆寺(本尊・壁画・秘仏像其の他)」)

(4) 昭和9年(1934)10月(『史蹟一』9-10 雑報「郷土史蹟研究資料写真の頒布」)

①同誌からの紹介、②郷土史料写真社 永江維章の「ご挨拶として」「国史郷土研究資料写真の提供!」。②によると、武蔵野町吉祥寺で郷土史料写真社を開業したところ、「国史郷土史の研究が各方面で非常に発達」して業務繁忙となり、材料需要の増加で手狭となったため今回「さる御後援者の御勧誘」で雑司ヶ谷へ移転して史料写真を供給するという。「十数年来文部省其の他公私学術研究団体に付随して各専門家指導」のもと「全国各種貴重資料の撮影に従事し、目下尚ほ百般の特殊研究材料を撮影且つ蒐集しつゝあり」、約一万余種の有効原版を秘蔵するとして、所有原版の種別(「一、全国史蹟名勝天然記念物」から「二四、平泉中尊寺関係写真」の24項)を提示。①によると同社は「友人知己の勧誘に依り」(原文ママ)開業した。

協会東京支部との何らかの関係を経て、写真業の受注を意図して協会へ入会したと推測され、文部省等の仕事を請けながら文化財写真の学術的撮影ならびに撮影・収集した写真の販売に特化していく様子が伺える。郷土史料写真社開業は、金子隆一氏、藤村里美氏による永江博の作家解説で昭和8年(1933)頃³⁰⁾とされており、永江の転居歴からも吉祥寺に移る昭和7年7月頃から雑司ヶ谷へ転居する同9年5月以前³¹⁾と考えられる。

同社の写真集『おもかげ』(1935年)は、『史蹟一』の新刊紹介³²⁾によると、過去に筆者の「畏友和田清馬君等に依り郷土史料写真帖が頒布」(写真帖詳細未詳)されたが中絶し、以後同様の刊行物が求められる中で発売されたもので、筆者は「この企てを年来勧誘して来た」という。無記名だが『史蹟一』編集人で京都市史蹟名勝天然記念物調査事務嘱託・協会東京支部幹事³³⁾であった矢吹活禪、もしくはその周辺によるものと思われる³⁴⁾。同社開業・移転に係る「勧誘」(前掲記事(4))の具体は不明だが、少なくともこのような文化財関係者の影響が想定される。

同社への注文に際しては、写真目録がある(前掲記事(4))他、「多麻川に就いて」と御申込になれば夫に関しての写真を見本として送つて来られます。其中で必要な分丈を取り、不必要な分をお返しになれば宜しい³⁵⁾(原文ママ)といった形で販売されていた。

5 戦前の永江維章・郷土史料写真社の活動

協会では大正15年(1926)³⁶⁾より年数回の見学旅行が開催され、『史蹟一』誌上では第138回(1943年)の催行が確認できる³⁷⁾。見学旅行は関東および関東周辺を中心とし、東北³⁸⁾や関西³⁹⁾でも実施された。昭和5年(1930)以降、参加者氏名に永江の名前が頻繁に現れるようになり⁴⁰⁾、前項の広告

【表1】永江維章(永江博)・郷土史料写真社が作成・販売した文化財写真集

戦前に発売されたことが確実なもの

著者	題	発行年月日	発行所	備考	『史蹟名勝天然記念物』記事
郷土史料写真社	おもかげ	1935年8月頃～	郷土史料写真社	月1回頒布(写真計4枚(縦込用薄台紙付大形カビネ2種、大形手札2種)、篠崎四郎(*1)による説明書付)。頒布は18回を予定(『史蹟名勝天然記念物』第10集第9号広告・第11集8号新刊紹介より)。	広告:第10集第8号・9号(1935年) 新刊紹介:第11集第8号(1936年)
永江博 (広告:郷土史料写真社 永江維章)	国史写真大集成(先史原史)	1937年10月	永江博	焼付印画50枚台紙付映入(『史蹟名勝天然記念物』第12集第10号広告より)	広告:第12集第10・11・12号(1937年) 第13集第1・4・5号(1938年)
永江博 (広告:郷土史料写真社 永江維章)	国史写真大集成(吉野朝)	1937年10月	永江博	台紙に写真貼付	—
郷土史料写真社 永江維章	上代写真集	1939年3月	郷土史料写真社	和装本、印刷。大日本国本会により皇紀二千六百年を前に企画された。発行日および内容の一部等が異なるものが存在する(*2)	—
永江維章	輝く肇国	1940年3月	大日本国本会		

【表2】永江維章が撮影した文化財写真集

戦前に発売されたことが確実なもの

編者	題	発行年月日	発行所	備考	『史蹟名勝天然記念物』記事
神奈川県郷土資料写真頒布会	郷土教育資料写真集成 輝く神奈川県	1941年2月頃～	神奈川県郷土資料写真頒布会	史蹟名勝天然記念物保存協会神奈川県支部後援。写真(不変色カビネ形5枚・手札型2枚を台紙に貼布)・解説を毎月5種ずつ頒布。撮影永江維章、解説石野英ら。頒布は第1期165種を予定(以上*3より)。その他、本文参照。	—

- *1 経歴詳細は「篠崎四郎 主要著作・論文目録一付・略年譜」(篠崎四郎『日本金石文の研究』(柏書房、1980年)) 参照。
 *2 国立国会図書館デジタルデータ書誌ID000000707698および奈良県立図書館所蔵本を確認した所、いずれも1940年11月発行、それぞれ内容の一部が異なる。
 *3 神奈川県郷土資料写真頒布会『郷土教育資料写真集成『輝く神奈川県』趣旨及び目録』(1941年)。

(3) にもあるように見学旅行で撮影した写真を販売していた⁴¹⁾。『史蹟一』見学旅行記事掲載写真の殆どは無記名だが、一部永江撮影と明記されたものがある⁴²⁾。永江は「数年来毎回の見学旅行に万障を繰合て参加し必要なる写真並記念撮影を奉仕」(1934年)⁴³⁾し、永江が弔事で欠席したため写真撮影ができず写真掲載なしとの断りが書かれた記事(1935年)⁴⁴⁾もあることから、無記名写真に永江撮影のものが多く存在すると思われる⁴⁵⁾。永江は「本会の写真部長とも称すべき程密接な関係を有する」(1935年)⁴⁶⁾とされ、協会内で独特の立ち位置を築いていた。

永江・郷土史料写真社の写真集のうち、戦前に発売されたことが確実なものは【表1】の通りである。台紙に写真を貼付した形式のものを直接販売したと見られ、例外的に『輝く肇国』は印刷された出版物として刊行された。写真集には『史蹟一』見学旅行記事の無記名写真と同一の写真がある⁴⁷⁾。

この他、戦前の関東の府県下での活動を確認できた。東京府では、昭和5年(1930)以降東京掃苔会⁴⁸⁾や東京名墓顕彰会の掃苔会へ参加した。後者は機関誌『掃苔』が廃刊する昭和18年(1943)まで断続的に参加した⁴⁹⁾。土居浩氏は『掃苔』同人の中核は協会に深く関わっていたと指摘している⁵⁰⁾。また、多麻史談会には初期の見学会に参加し、戦後まで関わりを持った⁵¹⁾。同会主宰の菊池山哉は、永江と同様に協会の見学旅行の常連であったという⁵²⁾。同会在京幹事⁵³⁾の矢吹活禪・稲村坦元⁵⁴⁾の両名は、土居浩氏が『掃苔』同人の中核かつ協会に関わりが深い者として名前を挙げた人物である。

埼玉県では、昭和5年(1930)頃に稲村坦元の紹介で埼玉郷土会(本部は埼玉県史編纂事務所)に入会⁵⁵⁾した。同年から翌年にかけて同会の見学旅行で撮影を行っており⁵⁶⁾、広告(3)に相当すると考える。県史編纂上の要務として史蹟史料撮影に永江が同道したとの記事⁵⁷⁾もあり、当時編纂中の埼玉県史への関与が伺える。

神奈川県では、1940年前後の県の文化財事業に関し、同県『史蹟名勝天然記念物調査報告書』に永江撮影写真が掲載された⁵⁸⁾他、仏像を国宝申請するための撮影に出張したとの記事⁵⁹⁾がある。1940年代前半の郷土史雑誌によると、神奈川県史蹟めぐり同好会に頻繁に参加⁶⁰⁾し、同会および神奈川県郷土研究会で役員の一人名となっている⁶¹⁾。須田英一氏によると、これらの郷土研究団体は県の文化財政策と軌を一にし、団体の主要メンバーは県の史蹟名勝天然記念物調査会委員・協会神奈川県支部役員と重なっていたと指摘されている⁶²⁾。永江は同県の関係者との関係を深めながら文化財保護活動の一端にも加わっていた。また、協会神奈川県支部後援の写真集『輝く神奈川県』(神奈川県郷土資料写真頒布会編、【表2】参照)では、同頒布会を組織した郷土史家鶴田栄太郎⁶³⁾とともに中心的存在であった⁶⁴⁾。

6 戦後の文化財写真撮影と日本民土俗研究会

永江はインタビューで全国の寺社仏閣等を歩いて撮影した写真24万枚の殆どが灰になったと語り、その原因は明示していないが戦災の被害を受けたのではないと思われる。しかし戦後も撮影を継続し『板橋区史』(1954年)⁶⁵⁾の編纂委員として資料写真撮影担当を務めた。さらに郷土史家として活動するようになり、日本民土俗研究会⁶⁶⁾主幹として民俗文化財へ関心を寄せた。冒頭の通り都内の田遊びの復活・保存に足跡を残し、祭祀歌詞の発刊や解説執筆も行った⁶⁷⁾。板橋区の田遊びについては、伊東専成(当

時板橋区史編纂委員）らと都無形文化財指定や区の助成実現に尽力した⁶⁸⁾。その他、石神の写真提供者として永江の名前が見える⁶⁹⁾。昭和38年（1963）7月に病没、墓所は谷中常在寺とされる⁷⁰⁾。

おわりに

以上、永江維章（永江博）の文化財写真に係る活動として確認できた事項を編年的に整理した。インタビューに「北海道を除けば日本中、その足跡いたらざるところなし」「全国の寺社仏閣、古跡、史跡をくまなく歩き」とあり、関与した仕事と地理的な活動範囲は本稿で挙げた以上に広範であったと推測される⁷¹⁾。永江資料には被写体の特定に時間を要する写真、撮影の時期や経緯が不明な写真が多く、表に掲載しなかった年未詳の写真集も複数存在する。それらの詳細解明に向けて、各種見学旅行等の行動履歴や永江が関与した出版物等が手掛かりになると考える。また、戦前戦後の文化財写真に永江が撮影・収集・販売したものが多く流布している可能性がある。

岡塚章子氏は文化財写真に関し、大正時代以降、文化財を写真表現のモチーフとして撮影する写真家が出現する一方、学術的資料としての文化財の写真の出版物を手掛ける便利堂などの会社から職人的写真家が輩出されたことを指摘した⁷²⁾。永江はアマチュアとして文化財の撮影を始め、写真関連企業に在籍する技術者であり東京写真研究会に所属する写真家という立場を経て、学術的な文化財写真の撮影・収集・販売を専門とする郷土史料写真社を興し、さらに文化財保護や民俗研究へ活動の幅を広げた。郷土史料写真社移転時の「ご挨拶として」（前掲記事（4））で、永江は同社について「他に類なき我国最初の新事業の事として幸に大方の高評価を博した」と述べている。今後、永江資料の分析や文部省等での文化財撮影実績の詳細、関係者とのネットワーク、同時代の文化財施策との関わり、文化財写真の流通状況等を踏まえた上で、同時期に文化財を撮影した会社や写真家らの中における永江維章および郷土史料写真社の評価が必要である。

【註】

- 1) 本稿では文化財保護法（昭和25年（1950））で文化財として規定された対象は、それ以前の時期に関する記述の場合でも「文化財」と表記する。「記念」「史跡」という表記については、出典の表記に即して「記念」「記念」「史跡」「史蹟」と表記する。また、旧字体は新字体にて表記する。
- 2) なお、永江資料については本号掲載の宮本花恵氏の論考がある。併せて参照されたい。
- 3) 引用内の参考文献は、本田安次『東京都民俗芸能誌』上（1984年、錦正社）、「田遊びの復活」（板橋区立郷土資料館『板橋区立郷土史料館紀要』創刊号（1980年）所収、小林保夫・伊藤専成「板橋における文化財保護のあゆみ」のうち）。
- 4) 朝日新聞社編『日本写真年鑑』第7年版（1931年、朝日新聞社）「現代写真家録」永江維章項に「旧名博、東京市生、東京写真研究会委員（東京市牛込区榎町）（原文ママ）。同第8年版（1932年）「現代写真家録」および同第9年版（1934年）「写真家録」の永江維章項にも「旧名博」とある。「フォトタイムス社小史」（オリエンタル写真工業株式会社編『オリエンタル写真工業株式会社三十年史』1950年、オリエンタル写真工業株式会社）に「永江博（後の維章）」、「東洋乾板」上（富士写真フイルム株式会社編『富士写真フイルム株式会社二十年史』1954年頃（マイクロ版「日本の会社史」（1994-1996年、丸善）所収））に「永江博氏は（略）現在の永江維章氏である」とある。
- 5) 金子隆一「永江博」（東京都写真美術館『東京都写真美術館叢書 日本写真家事典』（2000年、淡交社）、藤村里美「作家解説 永江博」（東京都写真美術館『芸術写真の精華—日本のピクトリアリズム 珠玉の名品展』図録、2011年）。

- 6) 無記名「作家解説 永江博」(東京都写真美術館『日本の写真 内なるかたち・外なるかたち 第1部 渡来から1945年まで』図録、1996年)。
- 7) 「写壇フース・フー」(『アサヒカメラ』4月号、1929年、朝日新聞社)
- 8) 「土俗研究の異端者 全国を股にかけて50年 永江維章氏」(『歴史読本』5月号、1960年、人物往来社)
- 9) 関東局『関東局施政三十年史』、1936年。関連法令は前掲註2宮本氏論考参照。
- 10) 「東洋乾板」上(前掲註4)
- 11) 東京肥料史刊行会『東京肥料史』(1945年)、北野裕子「1930年代前半期の商権擁護運動—全日本商権擁護連盟の組織解明を中心に」(大阪教育大学歴史学研究室『歴史研究』33、1996年)
- 12) 「雑報」(『写真月報』第24巻第6号、1919年、写真月報社。以下巻号は24-6と表記)。なお、1920年に深川区佐賀町肥料雑穀貿易業者を中心として結成された「佐賀町写友会」の発起人会および幹事の一人に永江博が見える(「雑報」『写真月報』26-1、1921年)。
- 13) 「第四編十三 各地の実験講演会」(菊地東陽先生伝記編纂会『菊地東陽伝』、1941年)
- 14) 勝田生「編輯の前後」(『カメラ』第10巻第10号、1929年)
- 15) 「消息」(『写真月報』34-11、1929年)
- 16) 『日本写真年鑑』第2年版(1926年)～同第9年版(1934年)。第8・9年版では東横町と東京市外吉祥寺に所在。
- 17) 朝日新聞社編『日本写真年鑑』第2～6年版(1926～1930年)。規模は30人、責任者は波岡恒三、永江博。
- 18) 朝日新聞社編『日本写真年鑑』第4・5年版(1928・1929年)。史蹟名勝天然記念物保存協会『史蹟名勝天然記念物』第5集第7号・第9号(1930年、刀江書院。以下『史蹟一』5-7、5-9と表記。本記事については後述)、「雑報」(『写真月報』37-6、1932年)にも同研究所を確認できる。後者は、東京写真研究会の第21回研展(1932年)に史蹟・名勝・天然記念物・国宝社寺宝の実体写真を出品した記事。
- 19) 「雑章」の早いものとしては、岸伝平『北野家々々 翠樹園』(1931年11月、川越史談会)、「河口湖畔より見たる富士山」(『第五十四回見学旅行記』(『史蹟一』6-11、1931年11月)、「雑報」(『写真月報』36-12、1931年12月)、『日本写真年鑑』第7年版(1931年12月)等。
- 20) 『写真月報』「雑報」の東京写真研究会関連記事では、昭和7年は例会出席者で雑章(37-3～5)、研展記事で博(37-3～4)・雑章(37-6)。昭和8年は、例会出席者で雑章(38-12)、研展記事で博(38-3)。「史蹟一」では、6-11(1931年11月発行)以降雑章となるが、8-1(1933年)「昭和七年度総会記事」や8-11(1933年)「第七十二回見学旅行記事」では博。
- 21) 永江博『国史写真大集成』(1937年)。後述の【表1】参照。
- 22) 『史蹟一』12-10(1937年)ほか。後述の【表1】参照。
- 23) 文部省編『法隆寺壁画保存方法調査報告』(1920年)
- 24) 「東洋乾板」上(前掲註4)では「大正六年文部省の最初の法隆寺壁画寺宝撮影に選ばれてその責任を果し」とし、『東京都写真美術館叢書 日本写真家事典』(前掲註5)では法隆寺撮影参加を1917年(大正6)10月としているが、調査報告(前掲註23)で確認できるのは、大正5年10月の委員会で田中の推薦が承認され、準備を経て12月11～26日に撮影したという内容である。また、調査報告「第一回 壁画撮影装置」と、田中松太郎「法隆寺金堂の壁画を撮影して」(『美術』第1巻第6号、1917年)の写真「法隆寺金堂壁画撮影中の光景」は撮影風景を写した同一の写真と思われるもので、写真中の三名のうち中央の人物の容姿は永江と似ている。
- 25) 協会については、丸山宏『「史蹟名勝天然記念物」の潮流—保存運動への道程』(復刻版『史蹟名勝天然記念物〈大正編〉解題・総目次・索引』2003年、不二出版)、高木博志『「史蹟名勝天然記念物」昭和編・解題』(復刻版『史蹟名勝天然記念物〈昭和編〉解題・総目次・索引』2008年、不二出版)、森本和男『文化財の社会史—近現代史と伝統文化の変遷』(2010年、彩流社)等。
- 26) 前掲註25森本氏論考。
- 27) 「史蹟名勝天然記念物保存協会規則」第三条(『史蹟一』1-1(1926年))
- 28) 『史蹟一』3-7(1928年)新入会員芳名に「永口博 東京市牛込区東横町。永口は永江の誤記であろう。会員の種別は維持会員と通常会員の2種があり、維持会員の会費は一ヶ月六円または一時金百円以上、通常会員は一ヶ月四円であった(前掲註27第五条)。
- 29) 「(元名勝の日本社代理部)史蹟と名勝社」と表記。中島直人氏によると、名勝の日本社は日本保勝協会の機関誌『名勝の日本』を発刊、史蹟名勝の調査等も実施した(「昭和初期における日本保勝協会の活動に関する研究」(日本都市計画学会『都市計画論文集』41-3、2006年)。本広告では永江実体写真研究所のみ振込先がある。代理部との表記

- から、史蹟と名勝社は取次ぎを行っていたか。
- 30) 前掲註5。
 - 31) 1932年7月以前に牛込区東椀町から吉祥寺へ(「転居」『写真月報』37-8、1932年)、1934年5月以前に豊島区雑司ヶ谷へ転居(「今昔会報」『今昔』第5巻第6号、1934年)。1936年8月頃までに郷土史料写真社の住所は同区目白町となる(「新刊紹介 おもかげ」(『史蹟一』11-8、1936年))。
 - 32) 前掲註31「新刊紹介 おもかげ」
 - 33) 土居浩「「墓ばかり調べている人」たちのネットワークー史蹟名勝天然紀年物保存協会における『掃苔』同人の邂逅を中心にー」(西海賢二・水谷類・渡部圭一・朽木量ほか『墓制・墓標研究の再構築ー歴史・考古・民俗学の現場からー』2010年、岩田書院)
 - 34) 高木博志氏によると昭和戦前期の同誌は編輯を主導した柴田常恵と矢吹活禪の色合いが強いとされる(前掲註25)。
 - 35) 無記名「郷土史料写真 永江維章蔵著」(原文ママ)(『多麻史談』第2巻第4号、1934年)
 - 36) 矢吹生「鎌倉史蹟見学旅行記」(『史蹟一』1-4)。以下、見学旅行関連記事で筆者名を記さないものは無記名記事。
 - 37) 「第三百三十八回豊橋・名古屋方面見学旅行記」(『史蹟一』18-8)
 - 38) 青森(「第六十四回見学旅行記」『史蹟一』7-12、1932年)、岩手(「第七十一回見学旅行記事」『史蹟』8-9、1933年)等。
 - 39) 1937年以降、皇紀二千六百年記念御歴代聖蹟巡拝旅行が関西で実施された(矢吹活禪「皇紀二千六百年記念第一回御歴代聖蹟巡拝旅行記(一)」『史蹟一』12-10等)。
 - 40) 「第三十八回見学記事」(『史蹟一』5-3、1930年)、前掲註37・38等。
 - 41) 葉「編輯後記」(『史蹟一』5-8、1930年)
 - 42) 「第九十五回見学旅行並新年会記事」(『史蹟一』11-3、1936年)。同記事の永江撮影写真のうち「記念撮影」「里見義実墓」は永江資料に同一の写真がある(90019927、90019928。いずれも永江を被許可者とする検閲印あり)。また、「第八十六回見学旅行記事」(『史蹟一』10-4、1935年)には写真の検閲被許可者として永江の名前が記されている。
 - 43) 「新年座談会並第七十五回見学旅行記事」(『史蹟一』9-3)
 - 44) 「第九十三回見学旅行記」(『史蹟一』10-12)
 - 45) なお、永江資料に無記名写真と同一の写真が複数ある。例として、「皇紀二千六百年記念第六回御歴代聖蹟巡拝旅行記(上)」(『史蹟一』16-1、1941年)掲載の「記念撮影(於檀原神宮)」と90019157。この時の見学旅行に永江は参加した(「皇紀二千六百年記念第六回御歴代聖蹟巡拝旅行記(下)」『史蹟一』16-3、1941年)。
 - 46) 前掲註31「新刊紹介 おもかげ」
 - 47) 例として、「第九十回見学旅行記事」(『史蹟一』10-8、1935年。この時の見学旅行に永江は参加)掲載写真「車塚古墳の石郭」は、『国史写真大集成 先史原始』(【表1】参照)、郷土史料写真社『上古史料写真集成(先史原始時代)』(年未詳(1941年以降))に同一の写真がある。
 - 48) 東京掃苔会第1回(「今昔雑記」『今昔』第1巻第3号、1930年)、第3回(無記名「一九の墓、玉菊の宿」『今昔』第2巻第2号、1931年)に参加。
 - 49) 「雑録」(『掃苔』1-1、1932年)、「第五十九回掃苔会」(『掃苔』12-11、1943年)等。
 - 50) 前掲註33
 - 51) 第2回見学会出席(『多麻史談』第2巻第1号、1934年)、「5週年記念の会」出席(第6巻2・3合併号、1938年)、第54回例会出席(第13巻第1号、1946年)。
 - 52) 篠崎四郎「菊池サンと房総」(『東京史談 菊池山哉先生追悼号』1970年、東京史談会)。なお、同文には永江に関する一文があり、永江は協会の見学旅行に参加して「いつしか斯界の名物男に」なったことや、田遊びの保存に関する記述がある。
 - 53) 「多麻史談会々則」『多麻史談』第2巻第1号、1934年
 - 54) 協会東京支部幹事(『史蹟一』1-11、1926年)、東京府兵事課史蹟係嘱託(東京府知事官房秘書課『東京府職員録』、1928年)、埼玉県史編纂主任・埼玉郷土会役員(幹事)(『埼玉史談』第1巻第1号、1930年(以下巻号は1-1と表記))。
 - 55) 「雑報」(『埼玉史談』1-6、1930年)
 - 56) 「雑報」(『埼玉史談』2-1・2-2、1930年、同2-3・2-4、1931年)
 - 57) 「雑報」(『埼玉史談』2-4、1931年)
 - 58) 神奈川県『史蹟名勝天然記念物調査報告書』5(1937年)、9(1941年)、10(1942年)
 - 59) 「彙報」『相武研究』第10年第7号、1941年(以下巻号は10-7と表記)

- 60) 例として昭和16年の第101～112回のうち10回参加（『会報』『相武研究』10-12、1941年）。
- 61) 史蹟めぐり同好会役員は会長（1名）、副会長（1名）、常任理事（若干名）、理事（若干名）、評議員（若干名）で構成され、永江は評議員（諮問機関として重要事に参画）の一人（『神奈川県史蹟めぐり同好会規約』『役員』『相武研究』10-4、1941年）。神奈川県郷土研究会役員は会長（1名）、副会長（2名）、評議員（若干名）、委員（若干名）、幹事（若干名）で構成され、永江は幹事（『会長ノ命ヲ承ケ会務ヲ処理』）の一人（『神奈川県郷土研究会役員』『郷土神奈川』第1巻第1号、1942年）。
- 62) 須田英一「史跡の保存・活用の担い手と地域社会との関わり―茅ヶ崎市国指定史跡「下寺尾官衙遺跡群」を構成する七堂伽藍跡を事例に一」（『法政大学多摩論集』35、2019年）
- 63) 神奈川県郷土資料写真頒布会『郷土教育資料写真集成『輝く神奈川県』趣旨及び目録』（1941年）、『編輯後記』（『神奈川文化』第2巻第7号、1941年）。同頒布会事務所は鶴田の自宅（横浜市）。鶴田については前掲註62に詳しい。
- 64) 「鶴田、永江両氏が石野先生其他の方々の方々の指導の下（略）刊行を決意された」（『彙報』『相武研究』10-3、1941年）。石野先生は石野瑛（当時協会神奈川県支部役員、神奈川県史蹟名勝天然記念物調査委員。寺崎弘康「戦前期における史蹟名勝天然記念物の保護活動について 史蹟名勝天然物調査会の活動をめぐって」（『かながわ文化財』97、2001年）、須田英一『遺跡保護行政とその担い手』（2014年、同成社）を参照した）。
- 65) 『板橋区史』（1954年、板橋区史刊行会）
- 66) 活動期間や規模等の詳細は未詳。
- 67) 日本民俗研究会『板橋区徳丸田遊歌詞』（1953年、非売品）、同『板橋区下赤塚田遊歌詞』（1954年、非売品）、永江維章「氷川神社祭儀と江本家田遊」（練馬郷土史研究会『郷土史研究ノート5 練馬氷川神社田遊歌詞』、1960年）
- 68) 「板橋区における文化財保護のあゆみ」（前掲註3）、「田遊びはこうして生き残った」（東京都板橋区編『わが街・いまむかし 板橋区制50周年記念誌』（1982年））
- 69) 東京都練馬区『練馬区史』（1957年）、高橋鉄『高橋鉄コレクション』（1962年、展望社）、高橋鉄『続・高橋鉄コレクション改訂版』（1964年、関東書房）等。原浩三「東京に遺る土俗神めぐり」には永江維章の写真集（題名不明）を石神の情報源としている記述がある（『日本及日本人』1413～1423号（1961年～1963年）のうち、1413、1415号（1961年）等）。
- 70) 江戸町名俚俗研究会『江戸東京寺社名集覧』第3巻（1963年）、第6巻（1964年）、非売品
- 71) この他、団体に関しては考古学会入会（『考古学雑誌』21-3、1931年）、日本郷土会での活動（『消息』『相武研究』10-8、1941年）等がある。また、「永江維章氏 松井中将を理事長とし、林陸軍大将山本海軍大将一條公、米内大将、柳川法相、荒木大将、鈴木大将等々を顧問参与とせる財団法人八紘会の参与に推さる。同会の八紘一宇国民体制実践に於ける同氏の今後の活躍こそ見物ならん」との記事もある（『消息』『相武研究』10-9、1941年）。
- 72) 岡塚章子「写された国宝―日本における文化財写真の系譜」（東京都写真美術館『写された国宝』2000年、便利堂）

【謝辞】

デジタルアーカイブス事業に係る永江資料のデータ整理にあたり、東京都写真美術館 藤村里美氏、遠藤みゆき氏より永江博氏についてご教示を賜りました。末尾ではございますが記して心よりお礼申し上げます。